

お茶から見るアジア (8)

モンゴル

茶葉の道

須賀 努

茶の栽培には北限がある。中国でいえば山東省南部から河南省南部あたりに商業ラインがあると言われている。当然それより北ではお茶は商業生産されないのだが、お茶を飲む、お茶を必要としている人々はたくさんおり、むしろ生活必需品となっている。今回は茶畑ではなく、茶の交易ルートを訪ねて、モンゴルを旅してみた。

モンゴル人の飲むお茶

モンゴルの茶と言えば、ミルクティが一般的だ。新疆ウイグルなどでも飲まれているレンガ茶と呼ばれる固形に固めた黒茶(磚茶)をナイフなどで削り、湯に入れて煮出し、牛乳を入れる。そして隠し味のように塩を加えて飲む。これをスーティー・ツァイと呼んでいる。昔の遊牧民たちは朝と昼はこのミルクティに雑穀などを混ぜて、食事の代わりにしていたとも言われており、茶がなければ日が過ごせないほど重要な物となっている。

モンゴル第二の都市、ダルハン市近郊で車がパンクしてしまい、遊牧民のゲルを訪問した時のこと。突然の訪問にも快く応じて、暖かいミルクティを入れてくれた。そのまろやかな味に驚いて聞くと「それは山羊の乳を入れた茶だ」と言われた。牛の乳だけではなく、山羊やラクダの乳を入れることもあるという。ゲルの主人によれば、この家族は羊と山羊を五百頭、牛も五十頭保有しており、その中からミルクを搾るらしい。

モンゴルとロシアの国境付近、セレンゲ県にある聖地「母なる木」を訪ねると、聖地の印として、固形茶が積み上げられ囲われていたのには、驚いた。茶は中国や日本でも仏教との関連で発展を見せているが、モンゴルには精霊信仰が根強く残されており、その祭事にも茶が使われていることは注目される。



モンゴル セレンゲ県 茶葉で囲われた聖地 (筆者撮影)

茶葉の道

今回モンゴルとロシアの国境、アルタンブランへ行った。ここに保税区を作り、自由貿易市場を作ろうという計画が何年も前からモンゴル政府により立てられているが、残念ながら現実には殆ど何もない更地の状



モンゴル ロシア国境 キャブタの茶城跡 (筆者撮影)

態であった。

そこからロシア側を眺めると、朽ち果てた白い建物が目に入る。あれは何かと尋ねると「あれは百―二百年前の茶貿易の拠点の跡」と言われて、驚いた。モンゴルではここをヒヤクトと言っているが、ロシアではキャプタ。一七二七年、清朝とロシアとの間で結ばれた「キャプタ条約」として世界史の教科書にも載っている歴史的な場所である。

キャプタの街はこの条約以降、急速な発展を見せ、ロシアと清朝の窓口の役割を果たした。特にロシアは茶の輸入に興味を示し、瞬く間に庶民にも広まった。この茶を運んだのが中国の山西商人。湖南、湖北などで栽培された茶葉を陝西省で加工し、現

在の内モンゴル、呼和浩特を拠点に活発に交易活動を行っていたという。

当時強大になりつつあった清国に対して、ロシアはその交易を求め、ある種朝貢のよくな形で、ここキャプタからウランバートル、呼和浩特、張家口を経由して北京へ入ったとある。同時に呼和浩特には数万人の回族が住んでおり、彼らのルートで茶葉が寧夏、蘭州、そして新疆へもたらされた。茶葉は駱駝で運ばれた。まさにシルクロードならぬティロド、茶葉の道である。

茶が国を動かした

十八世紀後半には既にキャプタにおいて、茶が最重要交易品となり、ロシアのみならず欧州へも広がりを見せていく。ロシア商人にとっても最も利幅の大きい商品となり、またモンゴルやシベリアの人々にとっては「三日食ることがなくても、一日茶を飲まないことはない」と言われるまでに、生活上の必需品となっていく。

ロシア政府はシベリアの価値を茶で認識したとも言われている。十九世紀も中頃になると、極東への道を開拓し始め、船を仕立てて動き始める。シベリア鉄道も開通し、茶葉の道は終焉を迎えた。ただ茶の重要性はますます高まり、それは革命後のソ連にも影響を与えた。

モンゴルは一九二一年に独立。新政府が成立すると、中国との交易は途絶え、茶葉が入らなくなる。その穴埋めは遠くグルジ

アから運ばれたと多くの人が言う。だがそんなに遠い所から大量の茶葉を運んだのだろうか。ある人曰く「中国はソ連に茶葉を売っていたが、それによってモンゴルを失った。モンゴル人は茶がなければ一日も暮らせないのに、その必需品をソ連から購入したのだから、ソ連の言うことを聞くしかなかったんだ」と。茶葉が一つの国を支配していた、どこまでが真実であろうか。

モンゴル茶の現状

「昔は羊一頭とレンガ茶一つを交換したものだ」と遊牧民の老人から聞いた。それ程価値のある物だったが、近年中国から安い茶葉がどんどん入ってきて、一時は漢字で書かれた湖南省の茯茶が大いに売れていた。「今でもお茶と言えばグルジア産緑茶だよ」と言う人もいたが、街の商店ではグルジア産は多くは見付からなかった。

だが、ここ数年中国製品の安全性に疑問が高まる中、農産物は「中国の物は買わない」という機運が高まって来ている。それに合わせて漢字で書かれた中国産は姿を消していたが、代わってモンゴル文字で書かれた何処の国とは分からない茶葉が出現するようになっていた。「あれは中国産だよ」商人はいとも簡単に説明する。今でも茶葉は戦略物資なのだろうか。中国政府がウイグルや内モンゴルに安いレンガ茶を供給していることも、一つの政治なのだろう。

(コラムニスト)